

常南自動車業界の覇者

安田文之助氏



○氏は神奈川県平塚の人、曾て本縣に移つて自動車業に手を伸ばしてから、其の業界に對する氏の動きは極めて鮮やかなものがある、元來安田氏は其性頗る剛直、一旦所信を抱いて事に臨むや斷乎不屈、一切の障礙を排して勇往邁進する。

○往年土浦自動車株式會社が經營其人を得ず、業績之が爲めに萎靡して、一とたびは會社の存續をさへも疑はるゝ状態に立ち至つたが、例々或る動機から安田氏が之を引受ける事となると、一朝にして其の頽勢は挽回されて來た、無論此の間には資金投下の苦心もあつた、従業員淘汰の煩累もあつた、而かし備くまで剛毅にして、事業にかけて大膽な氏は、一向不慮に社業の勃興を計つた、刷れゆく堤を防ぐには、流されるまゝに幾度も土論を積みゆく努力が要る、中途で挫折すれば萬事は休むのだ、安田氏は決して中途で屈しなかつた、終に目的は完全に達せられた。

○爾來土浦自動車の營業振りは躍進的に發展し、次いで社内の機構を革ため、其の専務には令弟である石渡氏を、理事には小澤氏を配して營業方針にもそれれん、改良を加ふるに及んで業績は愈々揚がり、今や毎期の決算報告に徴しても昔の不振と反對に相當の黒字を示すまでの基礎を作り上げた。

○要するに會社の内容さい充實すれば土浦自動車の路線は決して悲觀すべきものではなく、否、やりに依つては寧ろ常南に於ての主要路線と謂ひ得るものであるが故に、經營者の手腕一とつて同會社の前途は極めて多量である、幸ひにも安田氏今之を一手に收む、後日の飛躍を目して待つ可きである。

○氏は土浦自動車の外に、北相馬郡取手方面にも有望な路線を有してゐて、取手驛前の邸宅を活動の本陣として盛んに地方交通機關の發達完備に意を注いでゐる。

○事業にかけこ斯うした熱意のある人だけに、平生周圍に對する情義に於ても頗る温かいものがある、茨城縣自動車組合の役員としても、常人の學び得ざる熱心と親切とを傾けて同業の便益利福に寄與する事多く、更に自動車協會の集會に際しても、眞言正論、以て業界の爲めに悲慄しつゝあることは、氏を識る者の等しく認むる處である。

○由來自動車業界、理性あり氣骨ある人物乏きを憾むる時、一人の安田氏あるは、業界にとつて千鈞の重きを成すものであらう。

才能智略能く市政に貢献せる

水戸市助役 岡野 新氏



◎ 無論是等の諸計畫のうちには、正に市の福利増進に便したるものもあり、又多少の異算を見ても、素より市長其人の技術に待つ處大なりと雖も、一面に岡野助役の裡に在つての幹事時代の知事たるに其の職を退くや、偶々水戸市長改選の事あり、中時俊秀氏周囲の輿望を荷なうて市長となるや、岡野氏亦推されて之が助役となつた。

◎ 爾來水戸の市政は年と共に多事多端であつた、就中其の主なるものを數ふるも、曰く競馬場の設置、更に藤芥堤却揚の新設、さては常磐村の合併、近くは小學校舎の増築等、相次いで重要な施設計畫が實現された。

◎ 岡野氏助役となつて今や二期、市政の懸案漸く進捗して、更に大水戸市の建設にその一步を進めんとする機運に到達した、之に處する市當局の勢や奮とに多とす可きものがある、此時此際、表に此の名市長を有し、裡に此の名助役を得たり、市將來の發展向上、蓋し甚だ遠くは無いであらう、願はくは、一代の才子岡野助役、加賀自愛以て一層市の爲めに貢獻して貰ひたい。

◎ 關東市長會議なぞの開かれた場合、何時も吾が水戸市長中時俊秀氏が一異彩を放つてゐることは事實である、氏の識見と徳望は亦正にそうあり得る筈である、但し斯かる名市長であるが故に、必ずしも水戸市政が萬全を期し得るものとは限らない、更に又市會關係の方面に専らも非難なきを期し得ない、其の施設に於て時に幾くの缺陷あり、周囲の期待に時あつて多少の不信を買ふ場合もある、而かも能く之を補佐して市長をして大過無からしむる者は誰あらう、其の助役たる岡野氏である。

◎ 岡野氏は眞壁郡の人、幼にして俊魁、早く官途に就き、森正隆の知事時代水戸縣に任ぜられ、官房主事を命ぜられて以來、田中無事生に至るまで前後十代の知事に仕へて格勳勤精敢て懈たなかつた。

◎ 氏は其の性格頗る酒脱、自己の名前に執着をもたない、事を處するに當つても、其の功を必ず人に譲り、自から裡に在つて其の勢を辭さない、而かも明敏な頭腦は能く事物を未然に察知し、且つ人の表裏を識つて之に應接する、言ひ換ひれば何事も辨まいて乍ら、決して之を言辭の上には現はさない、他の論議を喜んで聴くけれど、自から進んで説を立つる事はない。

◎ 是の故に初めて岡野氏を見る者は、あまりに八面玲瓏にして氣骨に乏しきかの疑ひあれども、後ち能く氏を識る者、その圓轉權脫の裡、或る超え難き強い一線をその身邊に劃するを思ふであらう、所謂觀し易くして粗れ難き人とは蓋し岡野氏の如きを謂ふのでは無からうか。

◎ 斯うした特長は、果たして官房主事としての岡野氏を唯一の適任者とせずには置かなかつた、即ち官房主事の職は知事の秘書官である、知事をして有爲ならしむ可く、秘書の働き如何が之を支配する事は今更説くまでもあるまい、而かも當時政黨萬能の世にして、縣當局の主義方針、時あつてか政黨の容喙を斥げ得ざる場合もあつた、岡野氏は能く此の中間に處して、内は知事其人の任を全からしめ、外は政黨關係の操縦を過まらなかつた。

◎ 田中知事の時代に其の職を退くや、偶々水戸市長改選の事あり、中時俊秀氏周囲の輿望を荷なうて市長となるや、岡野氏亦推されて之が助役となつた。

◎ 爾來水戸の市政は年と共に多事多端であつた、就中其の主なるものを數ふるも、曰く競馬場の設置、更に藤芥堤却揚の新設、さては常磐村の合併、近くは小學校舎の増築等、相次いで重要な施設計畫が實現された。

温良圓滿銀行家としての典型を有する

第百銀行支店次長 石田弘夫氏

□銀行経営の要諦は、内に業務の實績を整備し、外に衆庶の蓄財金融に利便す、徒らに健實主義に偏重して取引の圓滑に躊躇するが如き、若くは人氣取り本位に没頭し動もすれば不真貸出しを敢てするが如き、皆俱に銀行家の本領に非ざる也。

□往年政府の方針に基づきて地方銀行の合同促進せらるゝに至るや、銀行其のもの、基礎甚だ鞏固を致すありと雖も、營業方針概むれ中央大銀行の主義に楷格せられて時に地方に於ける商工業者の便益に資する能はざるの憾みあり。

□若し之を忌憚なく評せば、現今の銀行は一部資本家の爲めの銀行にして、一般企業者の爲めの銀行に非ざるの觀を呈せり、若し銀行當業者にして、一は地方産業の發達に貢獻し、一は以て銀行それ自身の業績向上を期するあらば、宜しく従來の方針を積極に轉じて、飽くまで衆庶の恒益を主とするに努む可きなり。

□此の意味よりして川崎貯蓄銀行水戸支店の營業振りを看るに、終始能く時勢の要望に順應するものあるが如きは、地方人の爲め盡心に欣快せざるを得ず。

□川崎貯蓄は川崎第百の分身にして、其の資本の豊富にして預り金の巨額なる、皆是れ川崎第百が積年の致す處と雖も、亦た實に該貯蓄銀行の特有なる營業方針に因るものと謂はざる可からず。

□川崎貯蓄は常に健實を以て世上に認められ、更に一方貸出しの方面に至つては容易に他の銀行の學び難き迅速圓滑を旨とせり。

□銀行既に此の特長を有す、而かも支店長に有爲の人物を配す、業務の發展月と俱に著るしきものあるは蓋し是れ當然の結果か。

□支店長石田弘夫氏は水戸の出身にして、夙に東京に出て、銀行界に投じて川崎本店に勤務すること幾ばくならず、天稟の技量を認められて大阪支店長に榮進後關西の各支店を歴任して水戸支店長となる。

□由來善が水戸人は其の性おほむれ信無敬牙にして、圓滑滑脱なる可き實業家に適せず、事に當たるに理論を先きにして打算を後にするの偏癖あり、今人の事家として大成する者其だ鮮なきは一に是が爲め也。

□石田氏は然らず、内に剛直の實あるは是れ明らかに水戸人の特性を示めせども、快活圓脱の趣むきありて極はめて社交的なるは、是れ早くより關西地方に留まりて自然の修養竟に此處に至らしめたるものか。

□従がつて石田氏は情熱的なるが如くにして實は理性の人、放蕩なるが如くにして極はめて細心、人に和する如くにして人に化せられず、能く協調を旨とすれども決して平素の信條を忘れず、剛なるが如くにして柔、柔に似て而して剛、銀行家として第二の典型を備う。

□其後川崎貯蓄が第百銀行に併合さるゝや、氏即ち第百支店長たる打橋氏を補佐すべくその支店次長として應々敏腕を揮ひつゝあり、宜べなる哉、第百の業績隆々として向上す。



酒脱の風人を化し
綿密能く事を處す

齋藤一郎氏



竹園松翁、之を描きて四君子と謂ふ、而かも竹を以て第一となす所以のものは何ぞ、風來りて之を撃てば、爾々として靡くが如く揺ぶるが如くなりと雖も、根幹轟として敢て揺ゆまず。

之を鑑賞に供せんが、姿韻簡疏にして風韻其だ乏しと雖も、之を裁りて加工宜しきを得ば、用塗百較に通じて、耐久の力に富み色澤の妙愛す可し。若し快刀を用ふるも、横さまに之を打てば刀却つて折れ、正しく縦に之を切れば毫然として毫も礙たるところ無し。

是を人に背ひんか、能く忍従して廣く他を容るゝに似たれども、鞏固不拔の意志は平乎として斷じて屈せず。

辭令淡泊にして舉措淵然、一見まことに無頓着の風あれども、事理を稽うるに密にして用意常に周到、苟くも平生の方針を固まらず、徒らに利を以て之を誘はんとすれば敢然峻拒して再び顧みざるも、能く情理を盡くして事を謀れば、快然一諾、必ず約に背かず、即ち竹の如く爾がえ者も今若し本縣の事變界に覺めんか、稍々是に近きものを認むるに難からずと雖も、未だ齋藤一郎氏の如く酷はだ相背たる人物を見る事稀也。

齋藤氏が英城無盡の唯一の中堅たるは故に吾人の喋々を要せざる處、該會社が現時の大を致せるは素より小田部社長の技量と衆望の有る在るに歸す可しと雖も、守成十餘年、内には事務を整理し、外には社業を擴張して、竟に隆々の境を築きしに非ざるもの、實に支配人としての齋藤氏の手胸宜しきを得たるに因らざるは非ず。

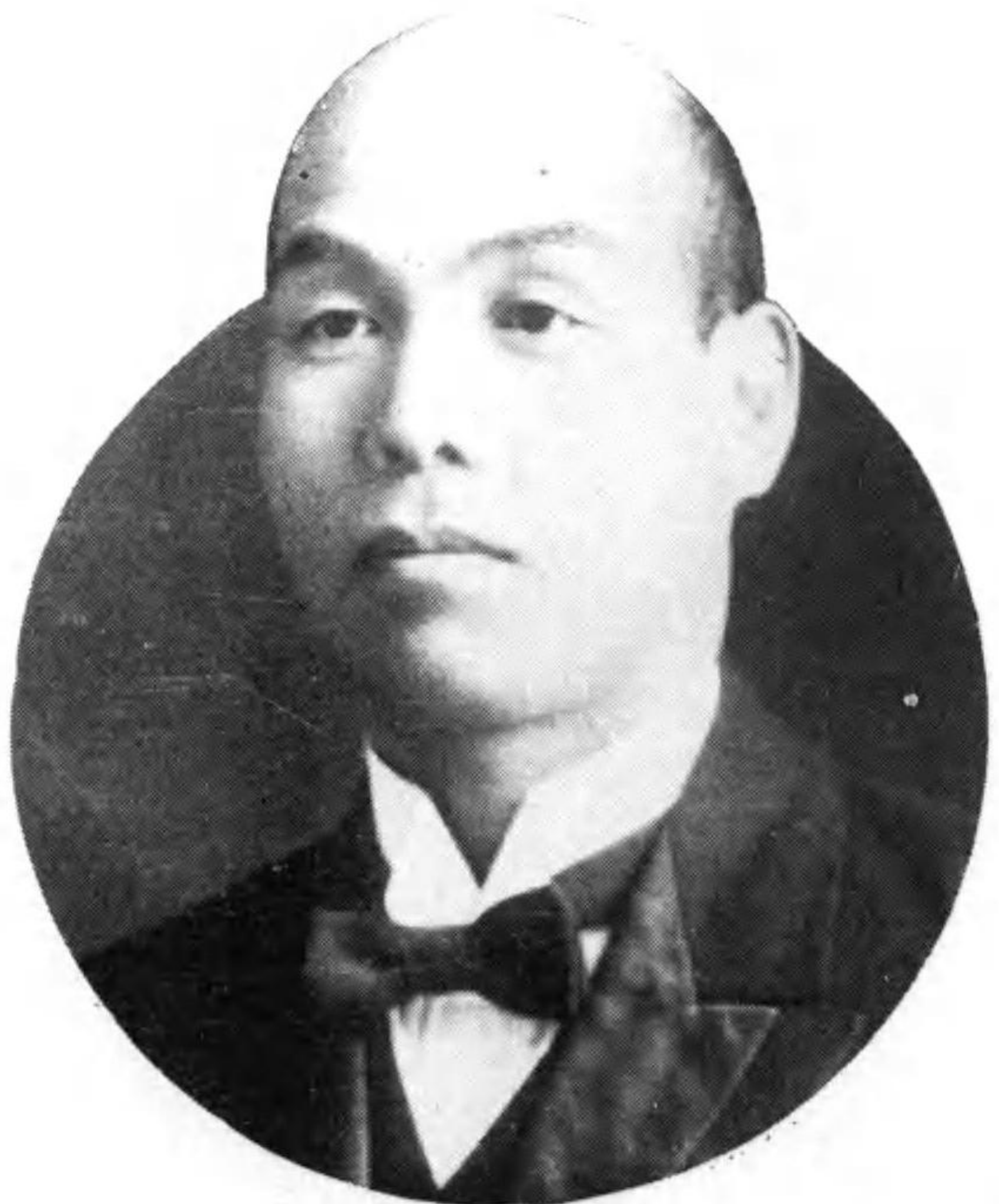
英城無盡の現況を案するに、其の加入者本位の營業方針と、簡易懇切の取扱ひ方法とを、能く縣下各地の商工農業者の信頼をあつめ、遺憾無く庶民金融の實を擧げて、業績年と共に進歩膨脹す。

故ある哉、齋藤氏の人に接して恬淡無礙、事に處して精密慎重、表に包容の才あれども裏に優柔ならず、能く他と回すれども能く他の化する處とならず、露骨なるが如くにして自重、放蕩なるが如くにして細心、斯の竹と相似たる有爲者の終始經營に努むるあり、英城無盡の將來益々有望なる可きは疑ひを容れず。

氏雖に久慈郡太田の地を相して、同町今後の發展向上を策する可く、水道の設備一日も遅延に附し難しとなし、率先播唱、遂に資本金十五萬圓の太田水河株式会社創設の計劃を立て、終に全くその所期を達成し、爾來太田全町民に對し甚大の利益便益を興へつゝあり、太田は固より河北に於ける樞要の地、今此の文化生活の惠澤を享けて一層の發展隆昌を致すあらば、是れ正に齋藤氏の貢獻、その一部の力をなすものと謂ふも亦過言に非ざる可し、氏其後、英城無盡を退き去りて太田水道の爲めに其の全力を傾注す、是れ或は氏の本意なるべしと雖も、前途益々多事なるべし英城無盡の中堅としての齋藤氏の名を見ざるに至りしは、吾人の甚だ寂寥に堪えざる所也。

業に従うて眞摯誠實
人に接して敦厚なる

小林 静氏



◎ 凡そ其の種類の何たるを問はず、商業を以て世に立とうとするには、特別の才能と、不撓不屈の克己心と、そして又商取引に唯一の資本である信用とを有する者でなくてはならぬ、殊に株式買取に於て一層然るを感ずるのだ。

◎ 株式買取は或る意味に於て商業市場と其の經營の苦心の上に共通する點が少なくない、勿論取扱ふ處の商品の種類、業務の運用に於て兩者全然相反するものではあるが、而かし乍らつとめて店舗を賑はす爲めに得意の吸引に急なる時は、現金の回収に就て非常な行き違ひがあり、さればとて客筋の選擇に餘りに嚴なる時は、日々の營業はそれだけ沈滞する、得意先が悉く健實で、而かも其の運脚が極めて廣い、そうする事が市場なり株式店なりの理想であつて然して又尋常經營者の容易に學び難き點であるのだ。

◎ 小林氏の經營する水戸市南町の小林株式店が、開業年代の古き事な事に於て取引先きの廣汎な點に於て、而して其の内容購買基礎固な點に於て、市内隨一の稱ある事は、今更喋々の要もあまい。

◎ 過去十數年を通じて水戸市の株界を一瞥し來たる時、幾多の株式店が甲起乙仆の状を示した實例は決して三四に止まらない、水戸市の商業家が株式買取に對して力を缺く爲めか、それも多少の原因であらうが、要は株式店經營が決して容易なもので無い事な、此の過去の事實に依つて立證し得るのだ。

◎ 是に反して小林株式店のみは十年一日、寧ろ月を追つて業績を向上し、信用を倍加しゆく所以のもの、寔に店主小林氏の技術と徳望とに基くものと斷言したい。

◎ 小林氏は東茨城郡中妻村加倉井の人、家代々地方の豪農として識られ、嚴父三郎翁は曾て縣會議員として錚々の名あり、後村長に擧げられ、重任せらるゝ事數回、終始能く村治に貢獻し郷黨の信望轟然として小林家に傳はるゝ。

◎ 小林氏初め官界に入り、職を久慈方面に奉すが、偶々おもしろく、成敗を賭して自己の細給を行はんとするに、五斗米に屈するよりも寧ろ實業界に投ずるに如かずと、乃ち直ちに官を辭して水戸に來り、二三銀行會社に關係し、萬貫の買と敏捷なる商才とは、忽ちにして周圍の重望を博した。

◎ 後水戸屈指の資産家岸氏と提携して「小樽商會」を興し、株式仲買を経營したが幾くもなく之を一手に取め、鐵砲町に小林株式店を開いた、而して氏が眞摯な營業振りを忽ちにして一般の信頼をかつめ、業務は隆々として進展し、やがて店舗の擴張を感ずるに至つて、現在の南町に地所家賃を買入れて規模を擴張し内容を充實して一段の飛躍を試みつゝ、以て今日に至つて居る。

◎ 往年市會議員に擧げられ、同志と相率えて公正熱誠に市政の爲めに盡瘁した、氏や固より實業に終始するの人、政黨の色彩甚だ濃厚ではないが、主義として新政俱樂部に参加し、黨勢擴張の爲めに努力するの積甚だ觀も可きものがある。

◎ 斯くして此の眞摯なる實業人は、やがて地方政界に其の頭角を現はし、周圍の感徳を受けて前期の縣會改選に立候補し、初陣には珍らしい高點を獲得したが、不測の事件氏を禍わひして、其の素志を縣政の上に伸ぶるの機會を得なかつた。

◎ 表裏多き政界の消息に、初めて善惡を管めた氏は、爾來此方面に野望を絶つて、一意専心その本業たる株式業に努力して、内には家運の基礎を固め、外には取引關係の便益を圖つてゐる、尙現に同業に善んせられ株式同業組合長に擧げられてゐる。

圓轉滑脱敢て争はず
中崎市長の良補佐役

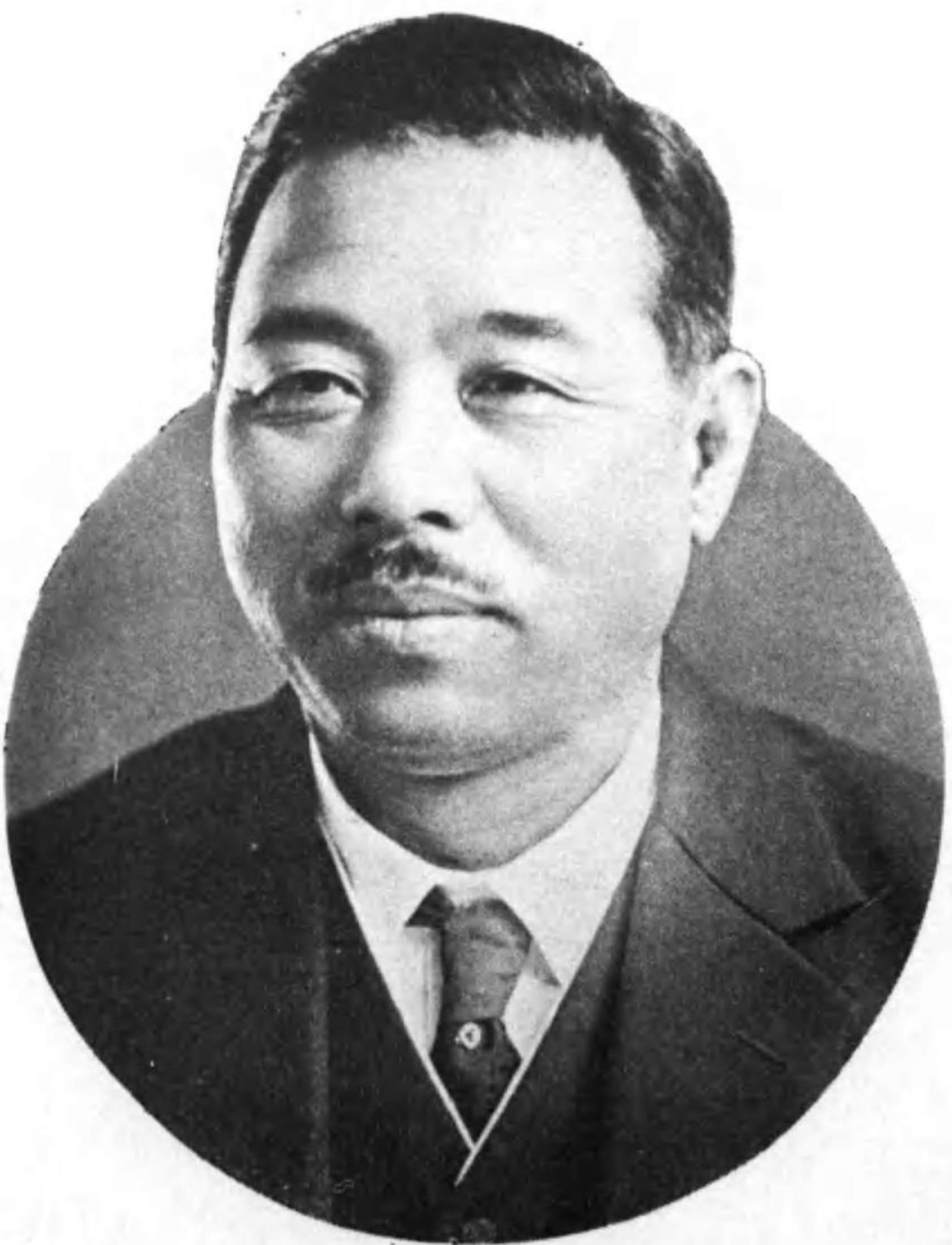
○人ありて、水戸市役所に収入役を訪ねて之と相對せんか、石川氏の眞骨頂を識らざる者は、此の人がその以前腰にサーベルを吊るした嚴めしい警察署長であつたとは想像し得ぬであらう。

○見よ、その宥落として物に拘泥りのない風を、そして如何なる場合にも對者に不滿の色を見せない、それだけに己れの内兜を人に知らさない、劍道の名人がヨクするやうに、突けば引くことをするが、此方で退かれば敢て進まずをしない、是の故に市會議員の或る者などが、何かの問題を提き上げて、今日こそ一番収入役を提つちめて呉れやうと乗込んで往つても、相手は冷靜水の如く、押せば押すなり引けば引くなり、手を放せば元の形で、何の事は無い暖簾に腕押しをするといふ、汗を掻いて力味返つたゞけ此方の損といつた有様である、或る意味からは人を喰つてゐるとも謂え得るが、是れだけの廣い度量と應對術とを持たざれば収入役の勤めは果たされないので。

○蓋し自治體に於ける三役なるものは、市町村のいづれを問はず、自治の運用と議員との間に立つた一種の防火壁であるやうなものだ、由來市町村會に議員たる者は、動もすれば自己の權限を盲目的に過信して、可成りに專横なる態度を執る傾きがある、それ等の者に應接する三役は、寧ろ不得要領でなければならぬ、若しも感情に従つて是非取捨の要領を示すと、其處に抜き差しならぬ暗礁を作つて仕舞う、風吹かば吹け、雨降らば降れ靜かに穩かに雨風の收まるを待つ用意が必要である、但し不得要領の間に、胸中おのづから確乎たる信條を藏めて置くべきは無論である、石川収入役は畢竟此の類の人物である。

○氏は曾て警察界に身を起し、精勵格闘、次第に累進して後々警視に任ぜられ、水戸警察署長を命ぜられた、當時政黨全盛の世で、官海の動搖一に黨人の支配に依るの觀があつた、茲に於てか、官人の總べては先づ其の任に盡すの前に「時の天下」に抱きす事を忘れてはならなかつた、石川氏能く此間に處して不即不離、内には部下を統制し外には衆庶の治安を固り、上司に奉じては忠實、庶民に接しては懇篤、之が爲に管内の事績大いに揚り、民衆警察の實完きを得た。

○往年中崎氏が鈴木前市長の後任となるや、市長直々に収入役として當時困難に在つた石川氏を推薦し、市會亦之を贊同して、其後再選以て今日に至つた。



水戸市収入役 石川巳之吉氏



潤達明朗にして事業に忠實なる

井熊製菓株式会社
取締役社長

小林勇之介氏

□ 職を得て勤を望むは古來人情の常なり、此の故に人若し其の居に安んずれば進んで利を覓め、財帛がなれば更に名を欲す、蓋し當然の事か。
 □ 然れども其の財を覓むるに貪慾我執、情に背き價に悖るも敢て顧みず、其の名を欲するや厚顔不遜、自から技倆を揚らず修養に努めず、頗りに誇張し漫りに僞飾して偏ひに家門を飾らんとするに急なるの類、轉俱に排す可し。
 □ 之に反して器量衆に越え、家聲愈々隆興し、實産益々餘裕あるに至つて、周囲の信任竟に其の人を推して名を成さしむ、寔に人世の榮華也、更に又、周囲の推舉ありと雖も自己の本分を識つて容易に起らず、驕ることなく懈たることなく、夜々として努め營々として働く者、寧ろ謙かに名を得る者よりも推賞欣慕す可し。
 □ 井熊製菓の經營者たる小林勇之介氏は實に此の力餘りて名を求むるを思はざるの人也、氏が嘗て甫めて其の業を興すや、水戸名産に種類多しと雖も未だ他縣に誇り得可き優良品なきを慨し、先づ梅羊羹のし梅等の製造方法に一大革命を試みんと期し、原料の精微に製法の工夫に、銳意専念敢て怠らず、此間に於ける小林氏の心事は一身の利害を度外して、唯一水戸名産の成功に依る郷土紹介を先決とするに在りし也。

□ 宿年の努力酬えられて自信ある製品を公けにするに至るや、氏思ひらく、事業の大規模なるを期するには、須らく大資本の共同を圖らざる可からずと、乃ち先提唱して井熊製菓株式会社を設立し、南町井熊本舖を營業所とし、上下市に完備せる製菓及び製函工場を建設し、斯くして一面に大量製出を期すると共に、一面に國內は勿論遠く臺灣朝鮮方面にまで販路の擴張を圖れり。
 □ 果たせる哉、今日の井熊羊羹は水戸名産品の代表なすものとして一般遊客の需用を一手に取め得たるは勿論、東京大阪地方に於ける大百貨店に出品しつゝ、ある井熊の製品が全國名産品と角逐して決して他のそれに譲らざるの信用を博するに至れり。
 □ 古來「名物に皆い物無し」と謂ふ、是れ畢竟名産品の製造者が優真なる製品に依つて賣る事と思はず、粗製濫造の土産品を著名なる郷土の名に依りて賣らん事を思ふの結果也。
 □ 小林氏が夙に留意せるは即ち此點に在り、従つて井熊製菓會社の方針は名産品を造るに非ずして優良品を造るに在り、茲に於てか、井熊羊羹は「水戸名産」なるが故に名産なるに非ずして「井熊羊羹」なるが故に名産たるの評を獲得するに至れり。
 □ 事業に對する小林氏の抱負既に斯くの如し、其の眞摯着實の實は平生の進退行藏の一切を伴して、人に接するに快活朗朗、事を決するに勇往果斷、利害に執着無く名間に超越す、恒産に於て信用に於て、既に市會に起つとも縣會に臨むも、氏の意の如くなるあるに俾らばす、未だ愈來も野望を此點に挾はさざるは、蓋し氏以外に求め難き恬淡の風格也。
 □ 頗ぶに方今の地方有患なる者、おほむれ周囲の巧言令色に惑ふて自己の力量を過信し終には一身を修め家産を守るを忘れて牛可通の政治を談じ、以て得々然たり、此の輕佻の世に於て小林氏の如く業に従ひ身を處するに實實剛直の士を見るは洵に敬す可くして學ぶ可き也。

縣下銀行界の至寶

常陽銀行常任監査役

今井惟明氏



○若し實業如の人が官吏に轉身するとなら、それは不遇である如く思ふやうに、官吏上りの人が實業界に移つたとなら、其れは多くの場合眞い成績は望み得ない、屢々高幹官吏の輩が縁を離れて、或る事業會社の重要な地位に轉ずる例があるが、それは其の事業會社の一種の看板としての必要に基くもので、眞の事務家眞の經營者としては官吏上がりは決して適材とは謂へ得ない、而かし今井氏だけは斷然として此の例外である。

○眞には常陽銀行の活き字引で大黒柱、今は常陽銀行常任監査役、そして何時も人に接するに強剛として、温良圓満玉の如き今井惟明氏、それが昔は役人であつたといふのは面白いではないか、味噌が味噌臭いやうに、官吏には必ず一種の定規がある、而かも生涯脱けない定規がある、されど今井氏の那邊にもそれが無いのは寧ろ不思議だ。

○氏は水戸市の舊家に生まれたが、不幸にして幼少の時に両親を失なつた、そして叔父である備前町の大關某に引取られ、無論温かい養育は受けられ、流石に親無き兒の淋しい感じは幼な心を幾度か刺撃した、それが眞實な促がしたであらうが、元來性質も極めて伶俐であつて、物事に丹念で、學問勉強にも精を出した、それが周囲の認むる處となつて、明治十八年恰かも十五歳の時、茨城縣收稅課に雇はれた、爾來勤続九年、登用せられて茨城縣收稅課となり、明治二十九年茨城縣本町に合同して稅務管理課といふものを守部宮に設ける事になると、氏は水戸管理處に任ぜられて同地に赴任し、同三十八年七月轉じて本縣銚田稅務署長に榮進した。

○親は無くとも子に背つ、淋しかつた昔の孤兒は、斯くて華やかに今井家を再興した、明治四十二年になつて稅務管理局の改正が行はれると、氏は據置せられて守部宮稅務署長となり、其翌四十二年水戸稅務署長に擧げ、暫く浪人の自由を樂んだが、社會は有用の器に無難なるを許さず、當時の川崎水戸支店から懇請せられて同行國庫係主任に起用され、昨日に變る銀行家となつた。

○常陽銀行が龍ヶ崎銀行を合併するに及び、氏は川崎を辭して其の初代龍ヶ崎支店長に就任、大正七年本店に轉じて庶務課長心得となり、同九年課長に進み、昭和五年常陽五十の合併後、常陽銀行支那人兼調查課長に擧げられ、同九年常任監査役となつた。

○人つき合ひの多い銀行家で、而かも如才の無い今井氏であるのに猶ほ一滴も駄目煙草もムせて呑めないといふ不器用である、従つて取立て、云ふ程の興味もない、若し有りせば其れは仕事を出す事が氏の唯一の興味であつたかも知れない。

○夫人との間に二男三女あり、男の子は何れも銀行家として、長男惟正氏は常陽の石塚支店長、次男善政氏は川崎の大塚支店長として、俱に手胸を揮つてゐる、其の生え立ちに比して氏の晩年の幸福さよ、寔に立憲傳中の人にして又後進の活ける手本である。

着實以て一家の業を興し、穩健以て市政に貢献せる

水戸市會議員 澤田仁克氏



◎現水戸市會議員三十餘頭のうち、辯舌を以て起つ者、腕ヲ節を以て押切る者、術策を以て遊ぶ者、そうした人々を覓むれば決して二三にして止まるまい。

◎されど市政を檢討するにも、議員同志の交遊にも、唯だ信實それのみを以て終始しやうとする者を探ねたら、それは恐らく澤田氏一人のみと断ずるも敢て過言では無いであらう。且且子は必ずしも澤田氏以外の議員を不信實だとは云はない、唯だ澤田氏を其の最たる者だと言ふのである。

◎先づ其の實際を看よ、澤田氏は某議員の如く流暢自在な辯力を有しない、そして又某議員の如き深謀智略を藏しない、唯だ澤田氏の持つ者は偽はらざる純眞の心である、私交上にも何時も温かい情義を忘れない、議員としても夢にも駆け引きをする事を考へてゐない、有り餘の誠の姿で、卒直な辭令で、自己の力で能ふだけの仕事を致々として努め着々として成就させてゆく、之の故に氏と相約して裏切られたと云ふ者が無い、交遊年を久しうして飽きが来たと云ふ者が無い、是れ畢竟澤田氏のみが持つ純情の光りがそうさせてゆくのだ。

◎澤田氏は西茨城郡七會村の人、夙に文筆を愛するの風ありて、居村青年の間にもおのづから異彩を放つてゐた。

◎時は今を距る三十年前、當時早くも政界飛躍の野望を藏した前縣會議長石川市郎氏が、同志と相謀りて旬刊評論紙「桂華時報」を刊行し、盛んに憲政の要を論じて地方青年に呼びかけた、此時、社中同人に一個白面の青年記者ありて、能く石川氏を扶けつ、時報紙上に激濁の牛氣を添えしめた、是れぞ即ち今の澤田仁克氏其人であつたのだ。

◎即ち生活幾年かの後、氏は心密におもえらく、水戸市を中心として地方に於ける職業の勃興をよりして懶々旺々なるべし、此時にして看護婦養成の事業を企畫す、必ずや醫事衛生の發達と相俟つて相互を裨益すべきは疑ひを要さない、と。

◎力に直ちに水戸市南町に居を卜して看護婦養成所を開設し、兼ねるに各病院及一般家庭の看護婦派出の需めに要した、時機を得た其の計畫、誠實勤勉なその業務方針、それは直ちに世間の信用を博する基となつて、澤田氏の事業は年と共に發展の域に進んだ。

◎而かも時代の推移につれて所謂職業婦人の數が次第に加はるにつれて、一方には看護婦を志願するもの相次いで澤田氏の門に投ずるに及んで、南町の事務所は甚だ狹隘を告げたので、現在の鹿匠町に轉じ、甚處に宏壯完全な家屋を建設し、從前に幾倍する規模の擴張を行なつた、即ち今や大正看護婦會の名譽に當れ、斯くして各方面よりの招聘日に相次ぎ、數十の看護婦給んと席の暖まらぬ盛況を示してゐる。

◎内に着實な看護婦會長として、家業を成功せしめたる澤田氏が、外に穩健な紳士として社會上の信任を廣げ居やう答は無い、水戸市民の輿望は終に之を市會に送るに至つた。

◎政黨關係から云へば氏は久しく憲政派に所屬し、且つ榮務の關係から常磐病院の創立者である中時市長と肝膽相照らす處あれども、さりさて市長の前に迎合附する者では無い、市會議員として能く眞摯公正、以て當局に獻策し市政に貢獻する事に於て、斷えず隠れた勢力を拂つてゐる。

◎爾來市議たる事五期、今や氏は市會に缺く事の出来ぬ存在となつて、議員間時に多少の紛糾あるも氏即ちその安全網となつて議場の平和を圖つてゐる。

◎殊に氏の爲めに慶賀すべきは、その令嗣が多年榮雪の効成つて、今や陸軍少將に任ぜられ、既に北支事起るに際しては、拔擢せられて従軍し、爾來拔擢の努力を現はし、長官の信任を一身に聚めてゐると云ふ、澤田家の將來益々多幸多福と稱す可きであらう。



水戸市政界の頭目

市會議員 弓削徳次氏

○弓削家は水戸に於ける資産家中の優である、市内の目抜き南町通りの中央に、自家所有の貸家數十棟を一つの城壁として、奥深く構ひた堂々たる邸宅、見る人をして直ちに累代の富者たる事を察せしむるに充分である。

○先代徳三翁は人も知る篤實和平の勤儉家で、名聞を外に求めず、産を治めて能く内に勤めた、而かも世間富豪の類と其の趣きを異にし、金銭の取引きにも極めて温かい情義があつた、無論當然の義務を無視する如き不徳の輩には強かつたが、事情面に察す可き者に對しては頗る弱い優しさがあつた。

○常に多く語らぬ爲めに、仔細に翁の性格を知らない者は、兎角の評を試みたが、交はる事親きに及べば其の寡言の裡に包む温情と信義は、強い印象となつて永く翁の徳を慕はれてならなかつた、弓削家隆昌の基は翁の此の徳に依つて築かれたのである。

○徳次氏は其の令嗣である、早稻田大學政治科を卒業し、幾ばくもな翁の物故に依つて其の家産を継ぎ、孜孜として懈らず、但し新しい時代に生まれて、新しい智識を受けたために、翁の健實に過ぎたのに反して、氏は社會人としての澄明性に富んでゐた。

○之が爲めに交遊も廣く、各方面の事業にも關係し、果ては市政上にも餘力を伸ばすに至つた、無論亡き翁に肖て實業ではあるが、新人だけに翁よりも明瞭であり、且つ俊才である、確鑿の道にも曉らかであるが、社會奉仕をも忘れない、内心に誇まりはあるが喜んで社交界のつき合ひもする。

○そうした關係から實業界や市政界に於ける氏の存在は、先代以上に大きなものとなつてゐる、曾て市會議員となつてから、任期を重ねる事數回今や市會各派の間に一方の驍將となつて、牢平たる勢力容易に抜く可からざるものがある。

簡易なる金融機關として農商業者の要望に副ひる

茨城無盡株式會社社長

小田部利左衛門氏



◎ 信用組合の擴充や、農銀支店の増設やに就て、近時漸く地方人の要望の聲が旺んじつたのも、皆是れ農山漁村の富強者が、普遍的にして且つ簡便な金融機關に就てある事を物語る一とつての體左と見ることが出来る。

◎ 彼等は大都市に於ける商工業者のやうに巨萬の資金を要求しない彼等が常に思ひ悩むのは、適當つての零細な金の融通である、彼等は其の金に依つて新たに企業するのでは無く、豫定つけられた稼業の爲めに常住不斯之を求めて止まないのだ、その金の融通如何は直ちに彼等の生存を脅威するのだ。

◎ 彼等は皆、各地方に散在した、そして其の地方の情勢に順應した營業方針を持つ小銀行に依つてそのした要望を充たして来た、而かも數年前から行はれて来た地方銀行の合同促進は、今や全く政府の目指した一縣一行主義を完全に實現した、そして又其の合同された一つの銀行の方針は、明らかに都會中心主義となつて、地方人の爲めの融通機關ではなくなつた、殊に中産以下の人々にとつての銀行の存在は、終にその生活と何の交渉も持たぬものとなつて仕舞つた。

◎ 茲に於てか、地方人は地方人の爲めの金融機關を要望する時代が来た、庶民金庫や、公益質屋の施設が漸く盛んに行はれて来たのも亦是にそうした結果の現はれと見て差支ないであらう、更に此の以外に信用組合の擴張や農銀支店の増設に依つて一般の農商業者は簡易な金融を圖ろうとして居る。

◎ 斯うした時代に於て、農山漁村の人々を云はず、小資本の商業者と云はず、最も敏捷に、且つ最も簡便に資金の融通を圖り、更に一面には不時に備うる貯蓄に便し、斯くして中産以下の生活に一日も缺く能はざる金融機關となつてあるものは何であらう、即ち是れ無盡會社である、本縣に於ける無盡會社のうち、殊に逸早く時世の推移に着目して、率先斯業の擴張に手を染めた者は誰であらう、茨城無盡社たる小田部利左衛門氏其人である。

◎ 小田部氏は久慈郡太田町の人、往年偶々以爲らく、地方産業の發達は、當業者の努力固より主とすべきものではあるが、之に便するに簡易な金融機關の設備を要する事も亦無庸の間題である、乃ち氏自ら實を投じて先づ太田を中心とする無盡組織の商會を創設したが、計圖正に時を捉へて漸く其の體を擴充し、遂に斯の會社を以て嚆矢とする。

世に遠せざるを看取るや、進んで水戸市に轉じて茨城無盡株式會社を設立した、本縣に於ける株式組織の無盡會社が實現したのは、蓋と斯の會社を以て嚆矢とする。
◎ 氏は敦厚にして實實、事に富たつて極めて細心、寧ろ或る場合、あまりに用意周到に過ぎて潤滑の氣を缺くの憾らみはあるが、それだけに會社經營の上に一層の堅實を加ひ、基礎益々鞏固を致すもの、一に小田部氏の力に倚つて初めて望み得る處であらう。
◎ 數年以來、都鄙を通じて吹、暮つた財界不況の風は、直ちに有らゆる事業會社の經營を脅威し、勢ひ全國の無盡業者も亦その影響を受けた、斯うした時に吾が茨城無盡業の旗はどうであつたか、營業の擴張や、加入者の勧誘に就き、常に小田部社長の信譽とする漸進主義が、時に花やかで無い代りに、業蹟の上に何等の動搖をも來さなかつた、氏の強い意志と、鋭い才能が、斯うした點に依つても十分に窺ひ知らるゝでは無いか。
◎ 茨城無盡は斯くして本縣同業の王座を占めた、地方農商業者は斯くして此の會社の存在に依つて幾多の恵みを受けてゆくのだ。

縣下神職界の一異彩
道に忠に學に精しき

笠間稻荷神社々掌

埜 嘉一郎氏



で今副嘉一郎氏が引継ぎ其の社掌となつたものである。

○嘉一郎氏責任開達、曾て學生時代には可成りの我儘者であつた時、然るだけに、優柔無爲の今の神職界には横紙破りの傾きがある程だ、群書を渉獵して博覽強記、交遊を四方に求めて變遷自在、古事に通じ時世に明らか、文學を語り政治を論じ、往々として可ならざるは無い、放膽のやうで細心であり、徹である半面には又極めて情義もある。

○嘉一郎氏曾て以爲らく、社殿に於ける行事作法は神職の任務の一部である、吾が本東の務めは祭神の靈體發揚の以外に何物も無い筈だ、即ち稻荷神社の祭神たる宇迦御魂命の御事蹟を按じて、唯産業に資す可く諸々の計画を立て、之を神社の年中行事として、一には郷土の隆昌を促し、一には庶民善導の指針を作つた、曾ては地方民に多大の裨益を興へた農産具品評會の如き、關東名物の一として世人の喝采を博した全園櫻花大會の如き、農産縣下米城の爲めに、極めて適切なる農産獎勵の一助となりつゝ、ある献獻賑濟の如き、小學教育擴充の上に見ゆれば、頗る貢獻となつてゐる兒童成績品展覽會の如き、更に此外には笠間の秩を飾る菊花品評會や、新緑櫻の夏の初めの御田植之神事や、皆悉く埜氏の方策に基くもので、而かもそれ等は庶民享樂の裡に、稻荷祭神の靈體が名残りなく現しまれて、果ては「笠間稻荷」なるものが有らざる人々の家府の中に抜く事の出來ない深い縁故を結び付けてゆく、斯くて始めて神社の存在に大きな意義があり、斯くあらしめる事に於て始めて神職の責任は果たされるのである。

○此の以外に、郷土工藝を感入にするために、其の道者に研究資料や販路の便宜を興へて、眞人形、竹細工並に笠間陶器等の製作改良を奨励し、現に其の竹細工や笠間焼きに成る茶器花瓶等に對し、歡迎されるやうになり、又笠間の觀光施設に就ては、様々な工夫と方策を講じてゐるなど、埜氏の事績を數ひたら、到底餘白がゆるさお程だ。

○果たせる哉、笠間稻荷が關東の大社と謳はれて、一年の賽者實に五十萬人、笠間全町民の生活が一に稻荷に依つて保障され、更に又、觀光地茨城のために笠間町が大いなる存在となるに至つたのも、歸する處は埜氏の賜ものと稱するも、決して過言ではないと信ずる。

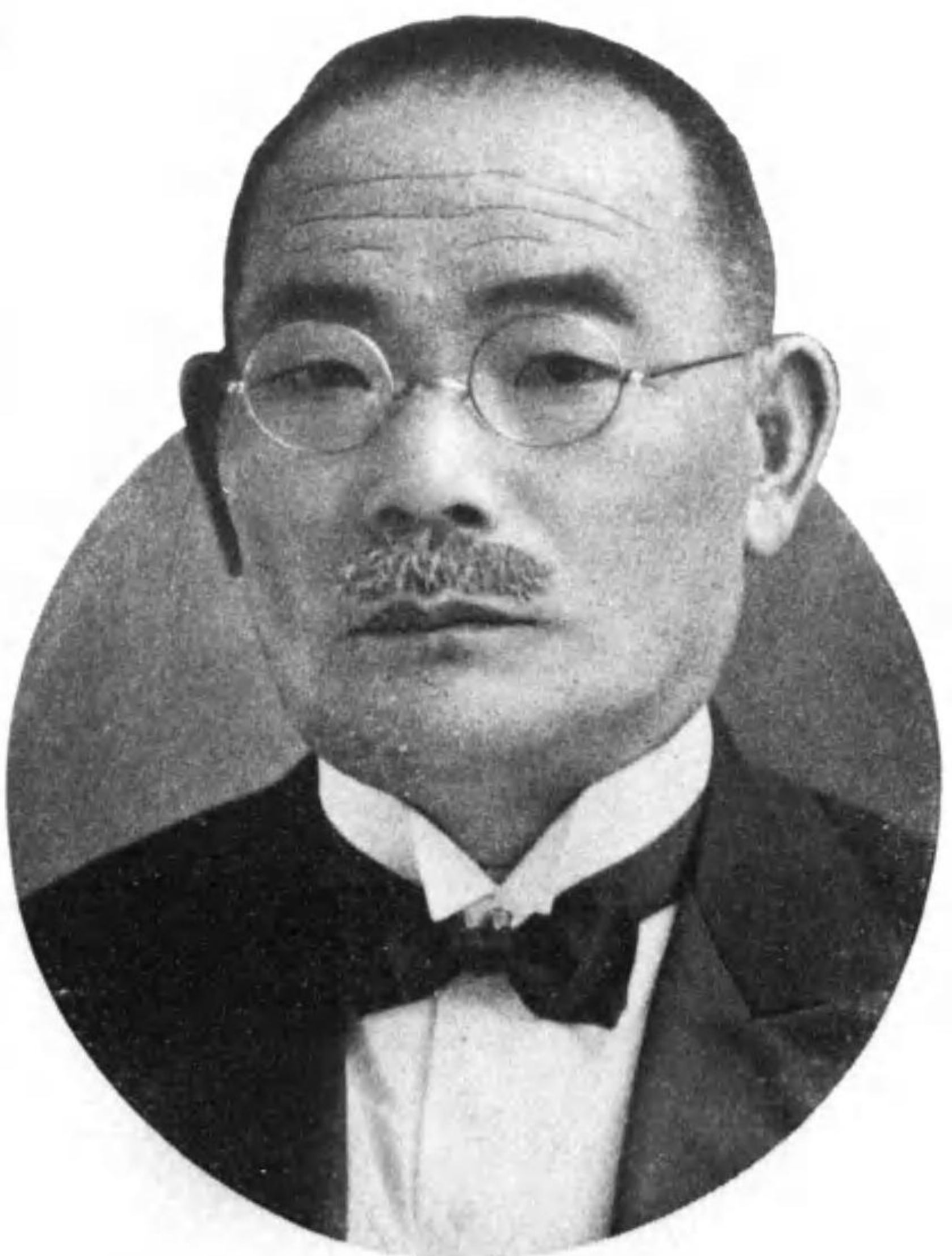
○由來埜家は遠く中臣・典・連より出たもので、正史には詳されてゐぬが、彼の藤原鎌足は此の中臣より出で、後ら京都に移り宮廷に仕へて藤原を姓としたと言ひ傳へられてゐる、それ程に由緒ある公卿の一族で、其の後裔埜島の埜家に住んだため姓を埜と稱するに至つたもので、嘉一郎氏の祖父瑞枝翁、縁故あつて笠間稻荷に奉養し、其の子孫に傳へて、今も瑞枝翁の御廟が、瑞枝翁の御廟に祀られてゐる。

○佛教徒が經文を掲げて大衆の懐に入るならば、神職は宜しく神祇の靈體を説いて街頭に起つ可きである、斯くしてこそ神に依つて成就された靈國の大業が、吾々の祖先に如何なる恩澤を垂れたかを知らしめて、依つて以て神社の存在が日本國民としての日常生活に切り離す事の出來ない大いなる連鎖を結び付けて得るのである。

○斯くするもせぬ、要は神に仕ふる者の覺悟だ一つである、然るに何ぞや、今日の神官神職はあまりにも自己の任務に無自覺で、内陣の奥に神體を護る事だけを考いて、神靈の力を拜殿の外に紹介する事を忘れてゐる、否、忘れてゐるのでは無い、畢竟彼等は、神とは深淵を窺ふもので、之を大衆に近づけるのは神を輕んずると考へてゐる、こゝろが、神と人との遠ざけてゆく原因となるのだ、今や國民精神總動員運動が行はれてゐる時代だ、日常生活の改善は宜い事ではあるが、それより寧ろ魂の改造が急務では無いか、魂の改造は神と人の接近である、斯うした事を既に數十年の昔に着眼して、内に在つては衣冠束帯、外に向つては市井の俚道者となつて、盛んに神靈發揚に努めた神職界の勇者がある、それは笠間稻荷神社々掌埜嘉一郎氏其人である。

建築請負同業者中
稀に見る大成功者

椿松太郎氏



○歳をうして松柏の節現はれ、家貧うして孝子出づ、それは孝子ばかりでは無い、非凡の人物は、其の多くは恵まれざる境遇より生まれ来る、世界的英雄ヒットラーが曾ては一兵卒の身であり、非常時日本の宰相たりし廣田弘毅が貧しい石屋の子たりし如きは、それを證する明らか事蹟だ。

○濃霧ではあるが温室の花は永きを保つ力が無い、之に反して野生の木は風雪を凌いで再生する、富める者は内に安んじて外に進行事を考ひない、之に反して乏しき者は自ら奮闘して大いに他日に備へん事を思ふ、上流社會に氣風の人無く、下層階級に天下を憂うる者が多いのは、蓋し偶然の結果ではない。

○椿氏もまた貧しき家庭の子であつた、千葉縣の生まれ、幼少時代は家庭の朝夕にも學業の便にも、懸らず不足勝る日常を過ごして来た、天性剛毅にして、何事にも負ける事の無い椿氏の、幼少のうちに何時か勝負の氣が芽生えて来た、自分の家には金が無い、従つて自分の將來は腕の力で開拓せねばならぬ、内に治める業を持たぬ自分は、外に計りて地位を築かねばならぬ、と斯んな風に椿氏は決心の胸を固めた。

○斯くて百戦の職業の中密かに着目したのは土木建築請負業であつた、文運月と共に進んでゆく今後の社會は、必ずや建築事業を隆昌せざるべきと椿氏は考へた、そして單身家郷を離れた氏は、一とたは地方に上つたが東京に、或は知己を求め或は任務を訪うて、身を托しては勤勞散で暮らす、心を傾けては誠實な表裏無く、以て自己の立身を固らした。椿氏には、春風秋雨一日と雖も倦む事を知りなかつた。

○點石を穿つ、氏の不羈の精神は終に所期の目的を達する日到来せずにはなかつた、苦心の結晶である若干の資本と椿氏の一團を率ゐる個々水戸市に移り、門戸を構へて財政に地方同業者の間に負して業務の擴張を行ふや、其の大膽な性格と細心の態度と、更に又、所謂一諾千金を辭せざる男性的な氣骨とが、請負事業の成績に現はれて来るにつれて、四方の信望蔚然として椿組の上を飾るに至つた。

○爾來水戸地方の大工事が殆んど椿組の請負に歸して、一家の業績は躍進又躍進、終に本縣請負業界の一大項目となり、前年貴族院多額納税議員選挙の際に、周圍の推選附し難くて立候補を名乗る迄の隆々たる聲望を負ふに至つた、但し此一戦は時期未だ氏の爲めに利せずして惜敗したが、是れ寧ろ後日に備ふる一試練で、近きにある大成を誰人も疑ふまい、現に同業組合長に推されて請負業の發展の爲めに努力を續けてゐる。

○氏が從來の事業成績を最も華やかに飾るものは第二聯隊及水戸高等學校の建築であつて、無論此工事完成までには椿氏ならでは能はぬ利害を放れた多くの犠牲的奉仕の力が進んでゐる、斯うした誠意は次第に各官廳方面にも認められて、現在では縣内各種の建築は、大抵氏の一手に歸せられてゐる有様である、椿組の信用程度は依つて知る可く、氏自身の任侠的な性格は依つて窺ふ可きであらう。

清楚の筆致寔に當代畫壇の權威たる

五島耕畝氏



書は以て志を述べ、畫は以て想を現はす、此故に筆者の心境暗潔にして、能く世俗に超越するを得ば、其の技學はすして神に入るを得ん、藝術の花香はしく咲き誇らんとする秋とはなつた。院展に構畫展に青龍社展に最後帝展に精進の歩りを盡した藝術家の力強い努力が崇高く華やかに飾り出さるゝを思ひば胸の締めを感じざるを得ない。物質文化の靡らざる屍び行く人心を和めて神苑に彷徨せしむるの思あらしむる藝術の殿堂其處に一入の趣を添えて神に迫らんの偉作を見出すの時、俗塵を脱却して邪念を去り、自然と渾然融和せるの情操に物態を離れて只清淨なる現し身と化するを得べき藝術の極に精進の歩りを捧げ得べきである。

山紫水明の本願に於て知名の藝術家を出すは偶然に非ずと雖も、殊に各人獨特の藝能を發揮してその初を唱するは全國に於ける藝術王國たるの定評を得る所以にして、藝民等しく精華の誇りに喜悅すべきである。而して煥めく明星の間に伍して五島耕畝畫伯が常に入神の神技を示し、帝展に一顯地を擡んずるものあるは又以て懷慕の念を高からしむるものがある。畫伯は本縣久慈郡の人、幼にして繪畫の天才を有し、荒木寛政氏に師事して専ら花鳥を學び、十畝、秀畝、春水、市畝氏等と共に傑出したるあり、院展に出品する毎に特選の榮譽を得、正に當代畫壇の寵兒と稱せらる。

月旦子が特に耕畝畫伯に對して敬慕の念を禁じ得ざる所以のものには、同畫伯が極めて温厚清静にして、其の風貌が物語を如く常に氣品あり、藝術家の態度を失はぬからである。

抑々藝術家なるものは、飽くまで俗界に超越して感嘆なる大自然の裡に、自己の天地を開拓してゆく可きものである。其處には名聞の何たるをも考ひない、功利の何たるをも欲しない、唯だ眼に映る風月流水を丹青に托して、紙面に漲る神韻の間に、世人の情操を養つてゆけば、其れが藝術家たるの天賦を盡したるものなるのである。

然るに近代畫家の一部には、或る忌むべき通弊があつて、先づ己れの興味に生きると云ふ事の外に、名利を貪はる事に足らぬとして、其れに及ぶに至つては、貴人顯門に阿附迎合して之に接近し、斯くして其の聲望を背景とし、依つて以て畫價の吊り上げを策んとする俗惡下劣の徒輩さいもある。

往昔、詩文に志さず者藝術に親む者、皆各々毅然たる品格を保ち、時に城主大名の召しに逢ふとも、吾が本意に副はざれば斷じて之に應ぜざるまでの氣概があつた、今日の畫家は其の作品を世俗の玩弄に供して、一木一草悉く人に媚びんが爲めに筆を動かすのである。

斯うした時代に耕畝畫伯は能く此の情弊に因はらざる事なく、淡然として名利に離れ、毅然として藝術家の境地を守る、故ある哉、畫伯の作品清楚にして氣韻に溢れ、おのつから衆を魅するの趣きがある、概近漸く繪描の商賣の多い時、茲處に五島耕畝畫伯を有するは吾が國美術界の爲め實に意を強うする所以である。

氣韻ある麗筆を以て當代日本畫界に鳴る

永田春水氏



○春水満伯は、其の構圖の妙と婉麗の筆とに於て、當代日本畫界の優者である、殊に花鳥を描いては春水の名の示すが如く、悠揚として迫らず爛爛として鮮やかな筆致、而かも俗に陥らず奇に流れず、能く眞率に自然を寫して其の間に獨創の妙趣を現はす、實に天才に非ざれば此の境地に達し得ないであらう。

○満伯は北相馬郡相馬町の宮藤家に生まれ、後ち永田家を冒した、幼にして優秀、其の屏作おのづから群章と異なり、暇あれば筆を把つて事物を寫し以て自から樂みとした。

○長じて東京美術學校に入り、卒業の後竟木寛献の門に入つて研鑽敢て倦まず、天稟の技倆之が爲めに愈々伸びて、令名同門を歴した。

○爾來満伯の作品は、たとひ一草一本の素描と雖も世に愛賞せられざるは無く、斯くして文展に二回、院展に六回といふ續け様の入選をしたばかりか、更に二回に及んでの特選の名譽を博するに至つた、後ち推薦せられて美術協會委員に擧げられ、昨年の文展には招待者として其の作品は無鑑査を以て入選した。

○若し夫れ、満伯が從來の作品中、特に江湖に名聲を馳せたものを擧げるとしたらそれは第十回文展に出品した「露のひび間」第十二回文展の「幽研」帝展第三回の「殘雪」等であつて、その孰れも微妙にして氣韻ある筆致と構圖、觀る者をして恍惚たらしめた。

○満伯の盛名は今や斯界の一權威となつて、日本畫會、讀畫會、池畔俱樂部等の審査員に推戴せられ、一門の繁榮年と共に加はる。

○満伯は其性極めて眞摯敦厚、常にその自邸たる東京豊島區西果嶋の畫室に籠つて丹青を凝らす外に、趣味としては釣り魚が好きで、時あつてか畫筆を捨てると、釣り竿を肩に飄然として流れを通り、靜かに糸を垂れて悠々自適の一日を樂む、而かも此間必ずしも魚を求むるのみでは無く、靜閑の境地におのづから湧きくる巧緻繊細な畫材を胸底に

練る事を忘れない。

○萬竹本年五十である、多年の蘊蓄今や熟成せんとする年配である、今後に於ける力作、それ奈何に天下を驚かすに足るものあるか、蓋し刮目して待つ可きであらう。

靈筆神に迫る概ある

飛田周山畫伯



政治に産業に教育に、今の世の萬の姿が品下りせるものあるは一に
 は現代の世相百般の韻律が缺けて居るためと思はれる。實用を求め、功利を
 置きて、能率の多少のみ論議して居る今の世の人の姿の動きは、往々にし
 て物質にのみ趨るの傾向となり、人情の輕薄を招き、眞の人生を味ふの識別
 情操を求め得られなくなつた。そこに新生の力を呼び起して、人生を形作る
 肉となり血となる藝術の心調を動かすの必要あることを、世の識者に知らせ
 たい。

詩歌、音樂、彫刻、繪畫等は皆藝術の發露であつて又美に觸れたる心
 の表顯は崇高なる道徳を昂揚せしむるものである。故に藝術を愛し美術を好
 むものは性情を養ひて、邪穢を蕩滌し、和順にして道徳を得るものである。
 故に風を移し俗を易ふる事、藝術に親しむを先とすべきではあるまいか、特
 に繪畫は宇宙の崇高なる姿を寫し出すものであるから、人生と自然との眞意
 を默然心通することが出来る。

獨逸の俚諺に「優れたる畫を懸けた室は、思想を懸けた室と同じで
 ある」といはれてゐる如く、畫は沈黙せる詩であつて、詩は發言せる畫であ
 る。詩人の人格を尊ぶより外に言はずして示す詩人の完全な要求せられ
 ならぬ。畫は従はらば彩色の絢爛を賞すべきに非ずして人格の反映が畫となつ
 て表顯するものでなくてはならぬ。吾人が茲に飛田周山畫伯を推稱するは、
 高深なる心情の把持者たるに基因するからである。氏は嘗て自己の意志を表
 示して

小生は畫料の多寡に依て其依頼に應ずるものに無之候、二十數年來某者の
 下納吏として奮闘し來り候も畢竟錢を取ることの面倒より來れる無精神の
 然らしむる處に外ならず故に從來幾度も畫會などの惡態をうけ候も小生の
 主眼として聞きたること一回も無之依然として窮措大を以て満足致し居り
 候。右様の次第に候へば畫料の多寡に依つて德義を無視する如きの惡は毛
 頭無之候の書を某氏に寄せてその心情を明かにした。以て畫伯の純潔なる全人格が窺
 ひ知らるゝであらう。

畫伯は明治十年一月茨城縣多賀郡原大塚に生る。嚴父正氏は夙に
 村政に參與し、且つ公共事業に貢獻すること多年、更に日露の役起るや兵事
 事務に功勞あるが故を以て勳八等に叙せらる。畫伯は正氏の嫡男通稱正郎周
 山と號す。天資繪畫を愛好し、郷校を卒業するや京都に遊びて、久保田東傳
 の門に學び、後竹内栢風氏に師事して研鑽すること多年、明治三十四年東上
 して橋本雅邦の門に入り、兼て美術院に入りて技を磨き、文展帝展に出品し
 て優賞を得ることなく、天來の天才は愈々加はり、遂に特選となり推選と
 なり、更に審査員となつて美術界の權威者たるに至つた。其の間古代の寶物
 を賞寫し學究に心を傾け其模範を築き上ぐるや文部省の囑託を受け、小學教科書
 の挿畫に筆を染め、社會に貢獻する處多きものがあつた。

氏は居常眞摯にして人格高く秀づるものあり、筆致勁勁、尋常者流の如く輕佻浮薄徒らに賣名の士に非ざるが故にその作品を床上に上せば以て所藏せる主人の品位をも
 高むるを得べく、畫伯の聲價愈々高きに至れるは技術の優秀と、品格の高潔なるに依るの賜といふべきである。本縣出身の美術大家素より多く各々畫風を異にして其名天下に鳴
 るは本邦畫壇の誇りとするべきものであるが、畫伯の廉潔な行動に又以て他の範たるに足るものがある。

畫伯の力量を見るの時、特に感深するものは神韻崇高を覺ゆるにあり、徒らに靡麗美に過ぐるなく、氣象呼吸自から顔を垂れて神人共に對するの境地に立たしむるも
 のがある。出世作品たる「神龍」に於て軍實の一助たるしめたる處により、政府より感狀を受くるに至つたのは心に愛國の熱情を留して影響に依り、人道教化に當らんとする人性至
 高の閃きを示すもので、眞に所界の明星と仰ぐに足るの名家と稱すべきである。

入神の技術熱烈の意氣
俱に洋畫界の權威たる

熊岡美彦氏



○文學、美術、工藝といった方面から觀た者が英城は、他縣に劣らぬ
 資料を數ふることが出来る、明治以前の遠い昔に遡るまでもなく、小説
 家としての菊池圃芳、詩人としての横瀬夜雨、無論二者ともに其の作品に不
 朽の名を残すまでの大いさは無いが、それでも地方の誇りの一つである事に
 相違は無い、工藝家として板谷波山、美術家として横山大觀、皆俱に郷土の
 爲めに氣を吐くに足り、而かも特に美術に在つては大觀の外に、飛田周山
 や木村武山、今は亡き觀山や華草を加ひて所謂五浦派と稱するもの、更に
 又當代畫壇の奇才を以て鳴る小川芋銭や、一々擧げれば濟々たる多士、あ
 だかも春の花園に紅白黄紫の妍を競うが如き觀が、但しそれ等の悉くが
 單騎動もすれば一般の眼に働き感ぜしめやうとするのを思ふ時、其處に洋
 畫の絶頂を唯ぞざるを得ない、茲に於てか本縣出身の熊岡美彦氏は否か郷土
 の爲めにも、又日本の洋畫界の爲めにも實に存在と謂ふ可きであらう。

○熊岡氏は新治郡石岡町の人、上浦中學を卒えてから東京美術學校に
 入り、洋畫の粹を嗣はめて大正三年優秀の譽れを荷つて同校を卒業した、斯
 くして新進の洋畫家としての熊岡氏の作品が世に公けにされると、具眼者の
 鑑賞は期せずして氏の作に集注された。

○而して文展第九回に出品した「母子」が目度く入選すると、帝
 展第一回には「朝鮮服を着た女」が特選の榮譽を博し、續いて同第三回の「抱
 かれた女」も亦特選となり、更に同第六回に出品した「緑衣」は美術院賞
 を授かるの榮譽を荷つた。

○大正十四年には帝展から推選されて審査員となり、翌十五年には氏
 が多年の宿志であった世界の美術佛蘭西の美術を研究の爲め同國に遊學し
 居ること四年、斯道に對しての大なる收穫は、彌が上にも氏の天才を磨い
 て昭和四年歸朝、同七年同志と相圖つて東光會を組織し、以て洋畫研究の先
 驅たるに任じた。

○其の年重ねて帝展審査員に擧げられ、十月に至つて熊岡繪畫道場を
 建設し、主として門下生を集めて茲處に熊岡氏獨自の洋畫に一生を傾えつ
 けやうとした。

○果たせる哉、昭和八年の帝展には同道場から一時に八名の入選者を
 出した、同九年二度が審査員となり、翌十年前記道場を擴張してが田の馬場
 に建物を増設し、東京府の公認を受けるに至つた、そして同年の文展には同
 道場から實に二十二人の入選者を出し、内一名は特選となるまゝの異數な難進と
 絶大な榮譽を博した。

○熊岡氏其の人の作品が、常に吾が邦洋畫界の物興に力強い光りを投げ掛
 けてゐる。

○現に帝國美術學校教授の職に在り、一方には熊岡繪畫道場長であり、更に
 又東光會の機關雜誌「美術」の主幹をも兼ねてゐる、其性眞摯温良ではあるが、
 天賦たる美術の精進には火の如き熱意を有し、且つ氏自ら持つ斯道精進の主張に就ては復讐何者をも耐せざる硬論正議を吐くの氣概がある。



筆致幽遠着想高雅真に南畫界の泰斗

佐川華谷畫伯

◎現代の日本畫壇は二つの流れに分割されてある。一は寫生を主とする所謂洋畫風の純寫實的傾向を帯び、眞と美とを描出するを主眼とし可なり到大衆の歡迎を博してゐるが、一は古來よりの山水動物を寫し、氣魄を雄び、魂の動きを示すを畫法の要諦とし、深遠なる鑑賞に依つて其の眞價を發見せしむるもので俗人に入り難しと雖も、眼識ある士人の嗜好を受けて其覇を唱へてゐる。然して我が國の美術界に於て徒らに寫生を主とし洋畫の領域に併存せらるゝを見るの時吾人は世界に誇るべき東洋美術の滅亡を痛歎せざるを得ない。

◎佐川華谷畫伯は本縣が生める南畫家の第一人者であり、俗を排し、神氣を養ひ、描法を研めて東洋美術の眞髓に觸れ、高遠幽雅の想を紙巾の上に表顯するや氣品に富める山水の靜謐に配するに人物其他動體の綜合的筆致の練達、四季日時雨風雲霧の變化の妙を捕へ、神韻瀟灑たるの趣きを感じしめ、感賞措く能はざるものがある。

◎先輩小室翠雲翁は本邦畫壇の寫實派主義に傾し、風韻雄重の眞髓を没却せるを慨して南畫振興の旗幟を掲げ、斯界に君臨するや、華谷畫伯の天才に倚賴する處多く擯んで、後進指導に當らしめ、以て之が大本を天下に問はしむるに至つた。而して畫伯の山水に至つては特技中の優秀を以て歡迎せられ、今や斯界の巨匠たるを稱せらるゝに至つた。

質實敦厚深く素志を包んで
専念一意能く業に精勵する

富田源藏氏



◎ 山の奥、里のほてまで尋ね見ん、世に知られざる人もありや。此の一首は長くも、明治大帝の御製である、地位に於て肩書に於て、既に早く社會の上層に其の名を現はしてある賢人君子決して鮮なしとはしない、されど其の現はれた君子賢人以外に有爲有識の人材は果たして無いものか。

◎ 泥中に咲く白蓮、砂中に埋もる金、それ等は皆、人に知れざる隠れた處に存在する、人にもありても亦其の如く、世に背きたる淺材高器が、何時如何なる果の果て、山の奥に潜んであるか、それを尋ね出だして世の爲め人の爲めに天賦の才を伸べしめたい、是か、大帝の御心であらざらぬか。

◎ 正に然り、既に用えられて其の天骨を發揮する知名人士の存在は、固より社會國家の爲め貴重ではあるが、更に又無名の有爲者を起用する事も忘れてならぬ爲政の要訣である、而かも世に漸く轉機激に洩れて来た今日に在つては、清雄高潔の士、寥ろ人に自重して市井の間に隠れてをりはせぬか。

◎ 假令は、水戸市政の將來に對して、家に先んじた幾多の抱負を有し、實業界の消長に就ても他に超えたる一家の管見を持つ聰明の人物が若く水戸市のうちに無いではないが、頭を回らせば方今市政の表面に立つ者、時に或は其の人を得ず、市政の動きに不純の計りあり。

◎ 斯くて終に、信義を守る者必ずしも容れられず、不信を敢てする者必ずしも斥けられず、正を覆んで正ならず、邪を行つて邪ならず、毀譽褒貶、混濁として其の定まる所を知らず、偶々、氣魄あり見識あるの人士、密かに此の狀を窺て叱咤する能はず、出で、衆に誇まらざるよりは、入りて自から道を樂しむに如かずと、斯うした氣分が今や市有力者の一部を強く支配して、終には「市會にでも出て働いて貰ひたいと思ふ人」が次第に其の影をひそめんとする傾向を生んで来た。

◎ 水戸市南町通りに、度量衡販賣を主とする雜物商の老舖、その主人富田源藏氏こそ、是に是に屬する人物ではあるまいか、富田家は、水戸以來の豪商を以て知らるゝ金町の富田家と近親の關係を有し、家門に於て水戸商人中第一の譽れを博してゐる。

◎ 源藏氏は、所謂「商法人」としての階級に於ては其の類を見ざる程常識に富んだ人で、實業方面は勿論の事、教育問題に對して政界の動向に、必ず首座にあたる一家の意見を藏してをり、知己に違ふ毎に慷慨の辭を吐き習俗の說を述べ、一々傾聴に値ひするものがある。

◎ 然れども氏は極めて眞摯敦厚の實、智略あり抱負ありとも容易に之を人に示して賢を誇る事ななせず、唯だ信する處を信じ、行ふ處を行ひ、以て自から過まらざらん事を努めて居る、桃李言はずおのづから聲を成す、如何に隠れても仁者の徳は人を化す、市有志の間にも、何時か富田氏の材器を認めて、是非とも市會に起つて貰ひ度い希望を申入れた例も再三に止まらなかつたが、思ふ處あるの故を以て固く之を辭した、而して唯だ僅かに水戸商工會議所議員たる事だけに甘んじて、此の以外に事を求めない、其の思ふ處とは何か、氏に敢て語らねども、おそらくは氏として現在の水戸市會に嫌ならぬ感があるのでは無いが。

◎ 獨り市會のみを謂はんとや、百戦の事、世に致さんとて運んで志を伸ぶるに、俱に計り共に語るの同志を得ざらんか、經綸之を布くに由無く、主張を擧すに術無く、終に却つて出でざるに優る不満と寂寞を感じず可し、容易に市會に打つて出でざる富田氏の眞意も亦正に此處に在るのでは無からうか。

◎ 看よ、富田源藏の店頭には一人富田氏の面上に、堅く何事をか信する理する眉宇、沈黙の裡に後日成すあらんとする其の氣魄、何する頼母しきであらう、市政多事、市會人無きの時、此の有爲者を起用し得るの時、夫れ果して何時ぞ。

○菊池氏の履歴を檢すると、それは恰かも年々にめぐり来る春の光りに伸びてゆく、若か木の精力と同様の感じがある、寸時も歇まぬ生育の気分、穀々として己れの輪廓を大きくしてゆく輝達の色、あまりにも鮮やかに、あまりにも旺盛である事に敬服させられる、是れ畢竟菊池氏天稟の才能技倆如何に業に超ゆるものあるかを物語るに充分である。

○菊池氏は久慈郡染和田村の人、累代の酒造家である。幼にして英邁、人に交はるに敦厚、太田中學卒業後一年志願兵として水戸歩兵第二聯隊に入營、誠實と格闘の譽れは營内に普く、大正六年には陸軍歩兵少尉に任ぜられた。

○其の年歸郷して在郷軍人会染和田分會長に擧げられ、大正十三年迄前後八年の長い間其の地位に留まつた、更に昭和二年には積年の徳望全村を歴して村長に推擧され、是れまた重任とする事三期、勤政實に十二年、此間一村の福利増進に努めたる幾多の事績定に顯著なるものがある。

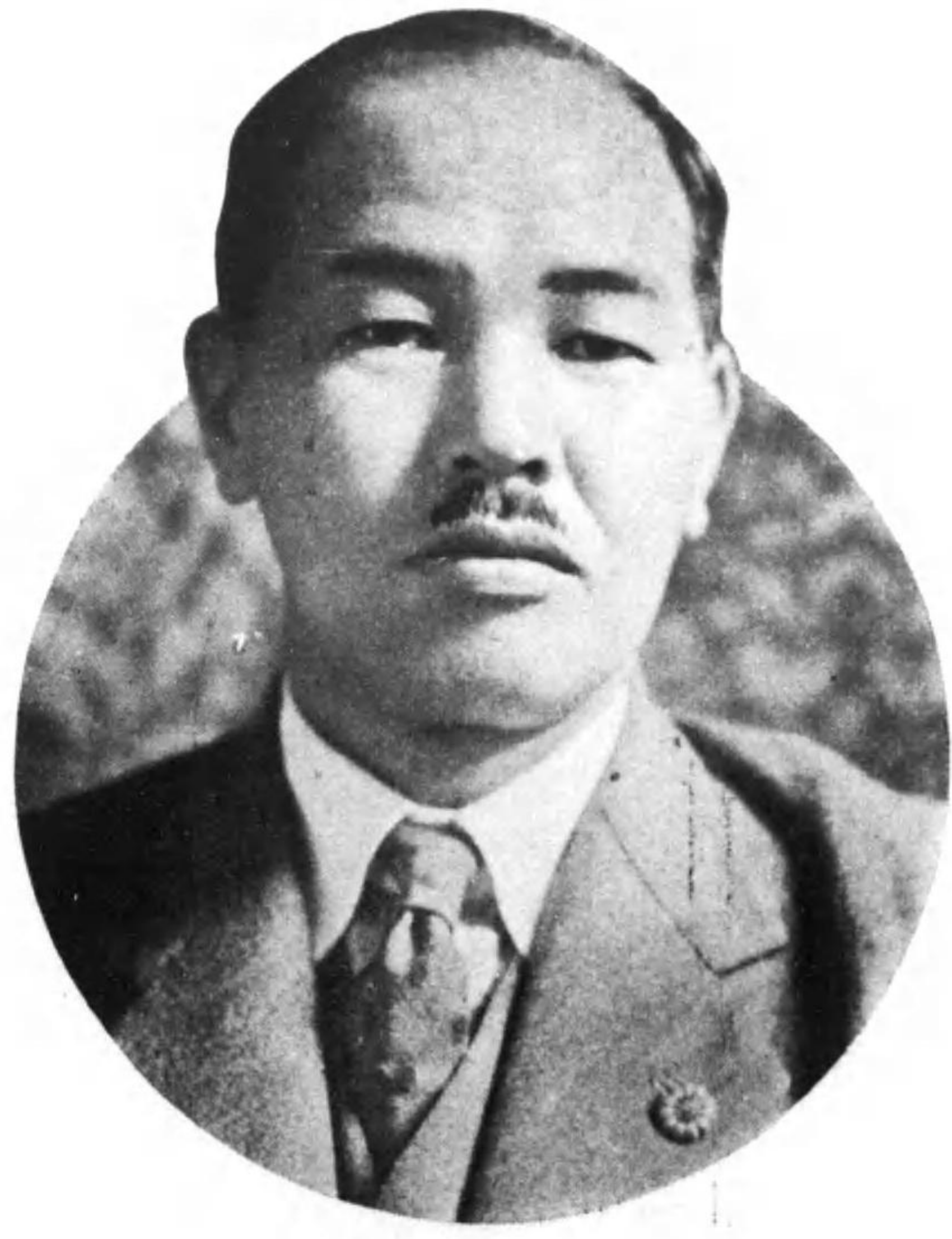
○昭和七年には消防組頭となり、其の翌八年水府煙草生産同業組合長に推され、同九年には染和田信用購買組合長、並に水府煙草作者購買組合長等に擧げられ、斯くして居村の信望は終に久慈一圓の人心を鎮むるに至り、恰も昭和十年の縣會議員選舉あるに際しては、周圍の熱望顧するに由無くして候補に立つや、翕然たる興望激つて大多数の得票となり、芽田度々縣會議員に當選した。

○其の後昭和十三年には茨城縣信用組合聯合會理事に就職、引續いて茨城縣購買組合聯合會理事、茨城縣煙草組合聯合會副會長となる。

○以上列記した経歴の間に、村會議員には前後八期、郡會議員には二期を勤めたといふのであるから、氏は學窓を出でると直ちに社會人と一に活躍に入り、而かも村治に貢献し公共に盡瘁すること殆んど終始一貫の有様である、殊に村議の重選三十三年に及べる如きは、氏の熱誠を物語る前に、村民の信頼業に超ゆるものあるを證して餘りあるは無いが、此の材器を抱いて今即ち縣治に臨む、後日の飛躍刮目に値ひすと謂へやう。

地位年と俱に進み聲望彌が上に高き

縣會議員 菊池信章氏



終始一貫地方の 福利増進に盡す

○氏は眞壁郡關本町の人、明治二十年十月を以て生る、長ずるに及んで俊英、明治二十二年近衛歩兵第二聯隊に入營、夙夜精勵して他まず、同二十五年十月、除隊に際して下士適任證書並に善行證書を下付せられた。

○爾來郷に在つて内には家業に精勵し外には公共に盡瘁し、二十六年四月の町會改選に方つては、周圍の嫉妬辭し難く、推されて町會議員となり、終始町治に貢獻、昭和二年に至るまで議員改選毎に當選した。

○初めて議員となつた年の十月には眞壁郡徴兵慰勞會から、從來の功勞一等の一と認められて慰勞金一封を贈られた、其の翌二十七年の秋、日清の國變斷絶して、戦費頼りに去來するに及んで、氏は充員召集令に接して原隊に投じ、明くる二十八年春三月、勇躍出征して清國本土並に臺灣等に轉戦、功に依りて歩兵軍曹に任ぜられ、其の年十一月日度度々故國に凱旋し、更に十二月に至つて勳八等瑞寶章、從軍勳章、並に一時金若干を下賜された。

○其の後、氏は關本軍友會の結成を提唱し、その成立を見るや、推されて會長となり、やがて帝國在郷軍人會の官制發布を見るに及んで之を老兵會と改め、引續き今日まで存續して會長と仰がれてゐる。

○氏はまた地方産業の發達や、金融事業の方面にも意を致し、明治三十三年土地の有力者相計りて株式會社關本銀行が設立されると、氏は選任せられて其の取締役となり、四十年の九月には眞壁郡會議員に舉げられた。

○越えて四十三年十二月、帝國在郷軍人會關本町分會會長となり、大正三年四月には消防組頭の榮職に推された、積年の誠實と努力とに依つて、周圍の信任を領めた氏の聲望は、此の組頭當時から隆々として全町を歴し、終に大正十年七月關本町長に推選せられ、更に十四年の改選に際して再選せられ、昭和二年の十月迄前後八年間、一意町治の振興に努めた。

○斯くて一方には鬼怒川砂利合資會社の創立と同時に其の代表社員となり、大正十五年關本町耕地整理組合の創立委員長となつて之が成立に奔走努力し、昭和二年其の組合長に就任、其年十二月學務委員に舉げられ、共に現在に及んでゐる、資性篤實、寔に地方有數の材と稱すべきである。



館野平作氏



徳望克く人と和し
衆望四邊に鍾まる

菊池兵四郎氏

◇ 菊池家は漆町の著姓なり、米六はその商號、累代清酒醸造を營み富豪を以て知らる、氏は先代兵四郎翁の令嗣にて明治二十四年九月二日を以て生る、水戸中學校を経て大阪高等工業學校醸造科を卒業、大正十三年八月例々先代の計に違ふや、直ちに家業を継ぎ爾來専ら銘酒『喜久一』の醸造に専念し愈々家運の隆昌に銳意せり。

◇ 此の間、町會議員、學務委員、港灣委員、青年會長、消防組第四部長、浴運協會副會長、湖會、商工俱樂部等の幹事に擧げられ同町の進展向上に努め夙に新進有爲の人物として囑望されつつありしが、大正六年遂に衆望を負うて縣會議員に當選、縣政に寄與する處多大なりし、殊に本縣中小商工業者に對する縣施設に對し一家の識見を凝して之が發展策を縣當局に進言しその功績顯著なるものあり。

◇ 更に滿洲視察並に軍隊慰問に赴き、歸來縣下各地に於て滿洲開拓並に移民の必要を力説し遂に滿洲移民を助長するに至れるは、氏が愛國の至情を發揮せるものとして稱揚せらる。

◇ 氏人と爲り温厚にして酒脱飄逸、從つて氏に深刻人を擊つの迫力を需むべからずと雖も、而かも氏の行く處常に春風に靡するの感あり、以て人を和し物を借調するの徳あり、今や世相險惡、人心また陰沈、人動もすれば濶達明則を缺くの時、氏の如き温顔快活の士はまことに時代の要求する好個の近代的人物と謂ふべきか。

◇ 敢て名利を欲せず、縣會史上に其足跡を印せざるに至れるも、至情は常に縣政、町政の進展に留意し、同志と謀りて眞摯貢獻の實を擧げつつあり、人格高邁の士として深く印象せらるるは蓋し偶然に非ざるなり。

俊英の質至誠の徳能く一郷を化する

縣會議員 鶴田隆治氏



○鶴田氏は鹿島郡中野村の豪農小澤總而氏の二男である、其の甫め居村の小學校に在る頃から其の才から群童に異なる俊魁の才が多かつた、次いで佐原中學を卒業後、進んで早稲田大學政治科を修め、切實琢磨の功は金玉の質に一層の光りを加えて、秀才の譽れは校門に高かつた。

○郷に還るや、内に家業を治むる外、専ら地方青年の指導誘掖に努め、俊英之が爲めに氏に對するは細心の禮を以てした、此の才能より修養ある前途多望の新人に當りて確目したのは行方郡八代村の素封家鶴田氏であつた、それ故に小澤鶴田兩家結縁の時機となつて隆治氏は終に鶴田家の養嗣子となつた。

○蘭花の香りは鉢を移すために變化は無かつた、生地中野村に於ける有爲の新人は、更に八代村に於て榮耀の極表であつた、果然、幾ばくもなく、村會議員に擧げられて、新進の識と聰明の才とを村治の上に傾けて終には村會の牛耳を執るに至つた。

○斯くて村議に重選せらるゝ事數回、更に村農會長に擧げられ、次いで郡農會總代、郡農會評議員、方面委員、親友會顧問等各種の名譽職に推された。

○斯くて如くにして地方農産業の發達改良の上に幾多の貢獻をしたばかりか、世運の變遷に於て幾多の事なる救済事業のためには、方面委員として能く其の任務を履行し、殊に昨年以來の支那事變に就て、之が鋭敏な權の運動には、率先盡力以て萬遺憾なきを期した。

○方今世人往々にして縣會人無きを嘆ず、殊に一薪會所屬議員中先には江は、後には秋山の兩氏を失ひ、陣營ひてかに秋風の寒矣たるを感ずる時、行塵の地に千ヶ崎氏と相並んで鶴田氏を有するは、是れ洵に同志の意を強うせしむる所以である、

精根を傾倒して縣治に奮勵する

縣會議員 平山哲男氏



ふるに識見あり、負より理路井然、堂々たる意見を陳述して縣政の向上を固く志するは、縣民の意を喚起すると同時に氏の手腕を信頼して本年九月の再選を祈るもの多きは、氏の推進力に利車をかけ得るものと稱すべきなり。

◇ 稻敷、北相馬の兩郡は常に水禍を被り農民治水に苦慮し憂色深きものあり、然も今や國家非常時局に當面し銃後の完備を期せざる可からざるの時に際し、根本的治水の實を擧げざれば夫れ着生を如何せんとの愛民至情に立脚して縣治に精勵する平山哲男氏の奮起は正に濟世の名士として推賞すべきなり。

◇ 氏は稻敷郡阿波村の名門に生れ、同地の小學校を卒へ後京華商業學校に大學優秀の成績を以て卒業し、郷に歸り専ら家事に努め、傍ら地方青年指導に勤む所あり、屢々青年同志の會同を求め、時事問題を論じては啓蒙につとめ、同地の産業組合を起して之が理事となり、今日同業の發達を見るに至れり。

◇ 性仁俠にして同志のために力を致すこと多大にして信望深く、小澤治氏が今日の地位を得たるも亦氏の感奮的努力の結果として、其の美情を感ぜられり遂に縣議補選に當選す、而して直ちに縣南治水の完成を期すべく同志と謀りて之が具體案を作製し、内務當局に達りて理想實現に奔走せるの熱誠は内務、大藏の許容する處となり着々として其功績を収むるに至れり。

◇ 氏は又産業の振興に留意し、農林蠶糸の諸事業に對し一家の識見を披瀝して此が改善進歩を圖り昨冬の最終縣會に於て初舞臺とは思はれぬ程の活躍を示し、早くも堀目的となりその將來に期待するもの多きを示せるは人格の賜と稱すべきなり。

◇ 今や政黨人小成に安んじ、その權威を疑はるゝあり、且つ縣會に於ける素質低下を叫ぶるゝ時に當り、平山氏の如く熱誠その職に精勵し、加

事業家にして又縣會中の有爲者

縣會議員 柴田政次氏



○現議中で、最も黨人離れのした、そして健實な實業家肌合を持つ者は柴田政次氏であらう。氏は多賀郡磯原町本風の人、眞摯にして任侠の質あり、常に喜んで人の面倒を見るところから、地方人の信頼甚だ厚く、大正六年には北中郷村の村長に擧げられ、更に町制實施と共に同十四年町長となり、専心町治の爲めに盡瘁する事前後二期。

柴田家は素と酒造業を以て家業としたが、往年磯原酒造株式會社の創立するに際し、氏は其の業務一切を同會社に譲渡し、新たに村本商を經營する事となつた、それは恰も大正十一年の頃である。

氏が實業の性は、さうゆに時代に適應した村本商を見る同に隆興を以てゆく事は極めて容易であつた、本風に建設した製材工場にはアール・バンドで自動バンドなど最新式の設備を充實させ、業績月毎に繁榮し、工場内には何時も活氣溢れる状態を示してゐる。尙此町に土木建築請負業にも従事してゐる。

内に斯くの如く家業を守り事に熱心する柴田氏は、外に地方福利の爲めに貢献する事を決して怠りない。是が爲に、松尾町警署管内警界検査委員、並に同町調査委員、多賀土木建築請負業組合長、多賀北部林業組合長、磯原信用販賣購買利用組合長等に推擧せられてゐる。柴田氏が地方的に各方面から此の程度まで厚い信頼を蒙つてゐることは、此の數多き肩書に徴して明らかである。去る大正十年九月、縣會議員に當選以來、矢張り其の健實主義を以て縣治に臨んでゐる。

特に此機會に於て柴田家の爲めに堪へたいのは、氏、合資を部員、の父君に劣らぬ大業をなすべく、其の事をする。數郡氏は神戶商大、出身、同窓間にも聞かされたスポーツマン。更に又優秀の器れあり、現に大連國貿易商に水産課に勤務し、周囲の人から其の多量な前途を囑言され、父君は地方同郷の先驅者として重望を負ひ、合嗣は官界有爲の新人たり、柴田家の幸福に淺まらざる限りである。

地方有数の徳望家

小沼哲雄氏

○小沼氏は行方郡麻生町の士族、その性極めて温良和順、而かも壯実おのづから信念あり、事に當たつて主張を述ぶるや、毅然として敢て屈せざる氣魄を備えてある、即ち漫りに説をなす事と雖も、一度が起れば必ず所信を行ふの人である、是の故に一郷の信望家に超ゆるものあり、推されて幾多の名譽職に就き、從來貽した事績も亦少なくない。

○大正二年四月麻生町會議員に擧げられ、其年十一月同町助役に就任専ら町治に貢獻して同五年助役を辭し、引續き町會議員として郷土發展の爲めに誠實を怠らなかつた。

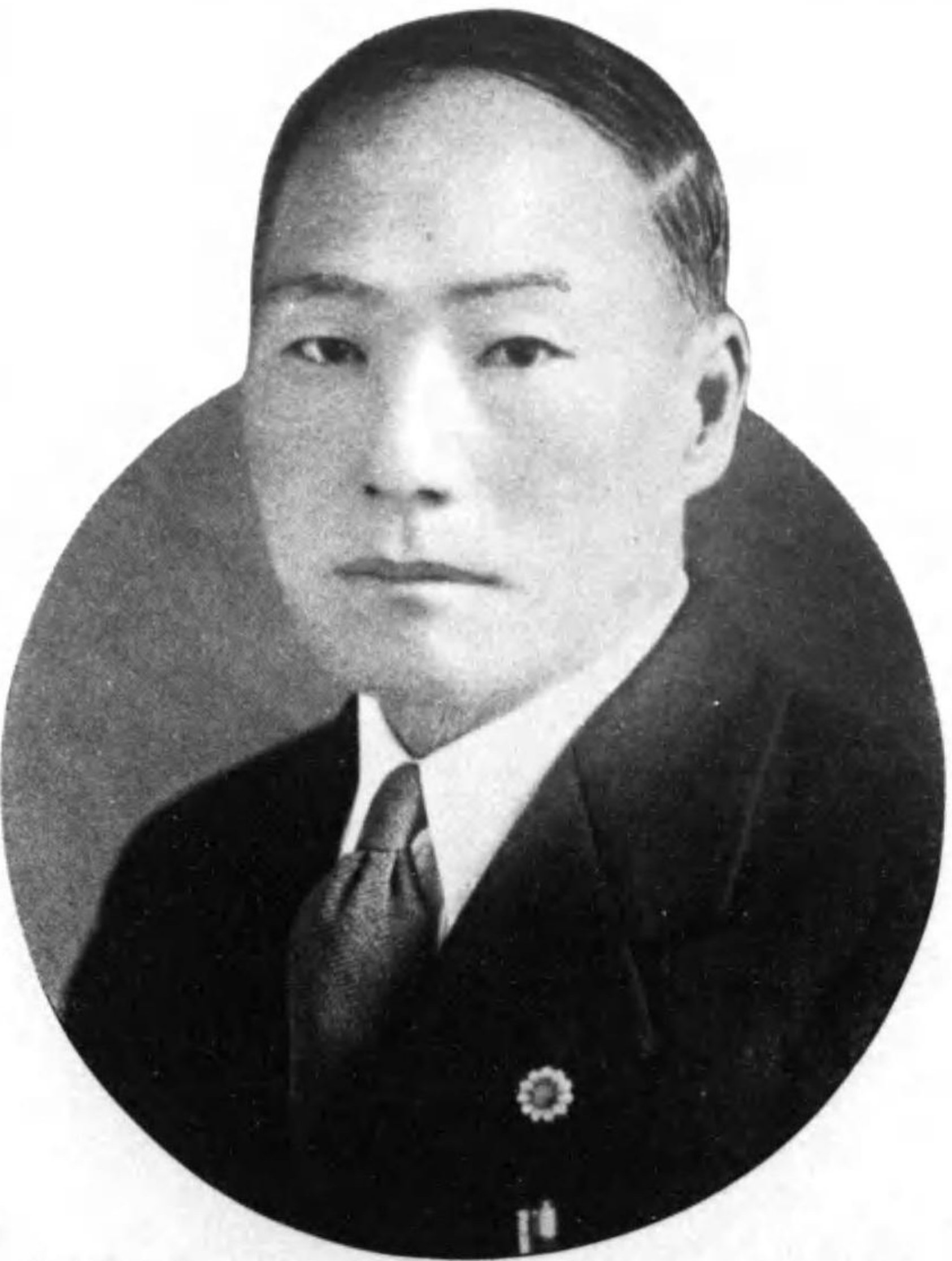
○超えて九年十月前町長が退職すると、今町民の囑望は期せずして氏の一身に鍾まり、終に推されて町長となつた、爾來其職に在る事前後三期を重ねて十二年、此間内には役場吏員の統制を圖り、外には町勢勃興の施設計畫宜しきを得て、一町の治績歴然として視る可きものあり。

○彼の一度に度々江餘曲折を見た麻生中學の建設問題や、蠶業取締所設置の計畫等、終に地方民の期待に副ふて實現し得るに至つた其の裏面に、氏の奔走憔悴の勞が、與かつて大いなる力をなしてゐた事を見がしてはなるまい。

○昭和六年の九月、縣會議員選挙が行はれると、氏を推選するの聲聞處に起り、氏も亦終に之を辭するに由無くして同月七日町長の職を罷めて立候補を宣し、其月二十日豫期以上の高點を收めて當選の榮譽を荷つた、斯くて縣會に列してからも、圓満無礙の性格が院内を化して同志議員中の重器とせらるゝに至つた事は勿論で、幾ばくもなく學事會員に擧げられた、そして兼に町長として一町自治の發達に忠實であつた如く、縣議として終始公正に縣政の向上に寄與した事は茲に繰返すまでも無い。

○小沼氏の斯うした事績と徳望は、終に行方全部の第一人者たるの令聞をほし、町會議員としても大正二年より十四年迄三期を重ね、嘗ては行方郡農會長に擧げられ、現在では町農會長、郡水産會長、方面委員、聯合會長、蠶業取締所麻生支所管内養蠶同業組合長、其他の名譽職に推戴されてゐる。

○時は正に内外多事、而して國力充實の鍵は、一に地方民の掌中に握られてゐる今日此時、小沼氏の如き健實温良の士を、重ねて縣會に送るの日が無くてはなるまい。



昭和十四年二月廿五日印刷
昭和十四年三月一日發行

「時の人」奥附
〔非賣品〕

編者 伊ハラキ時事社編輯局

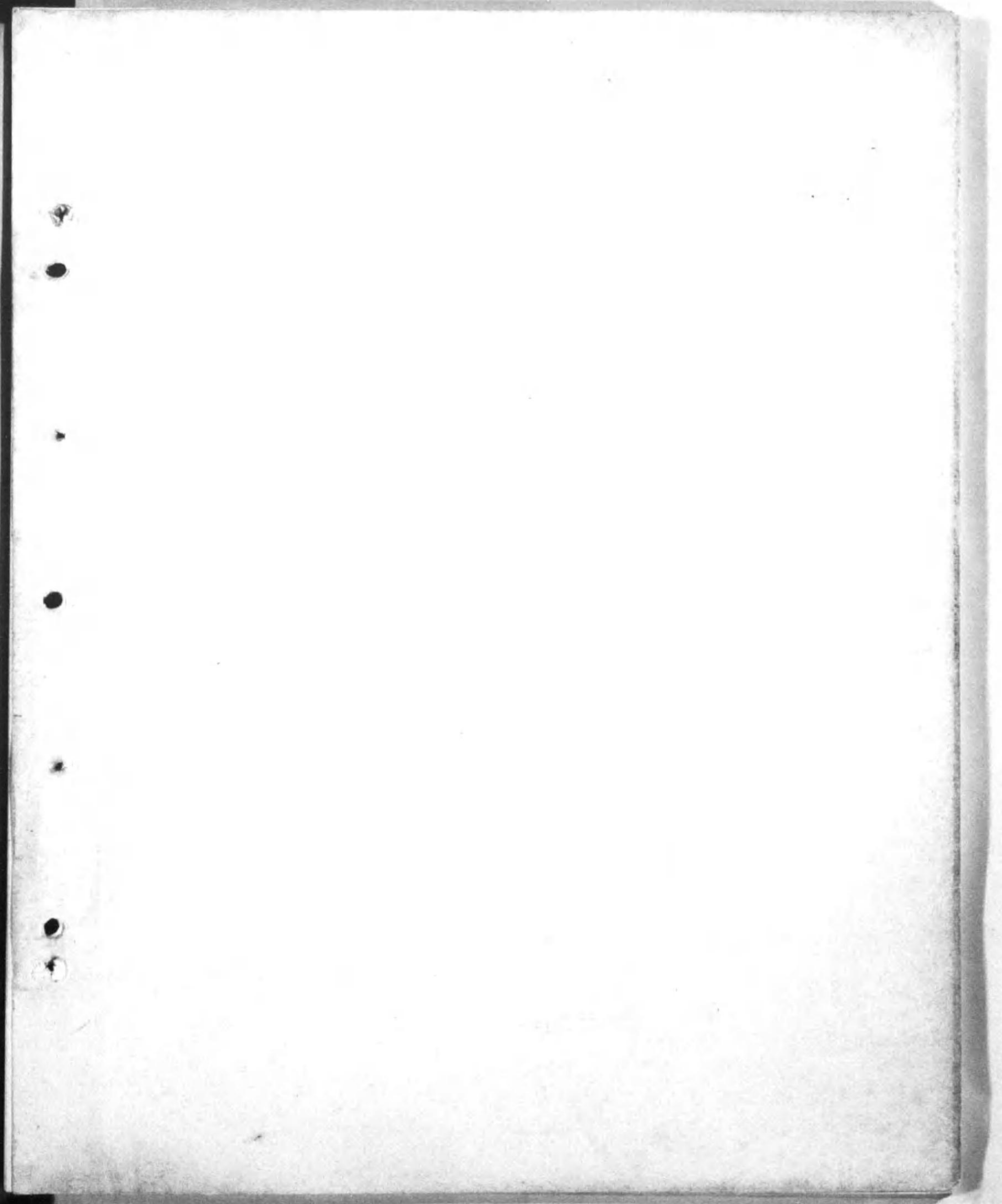
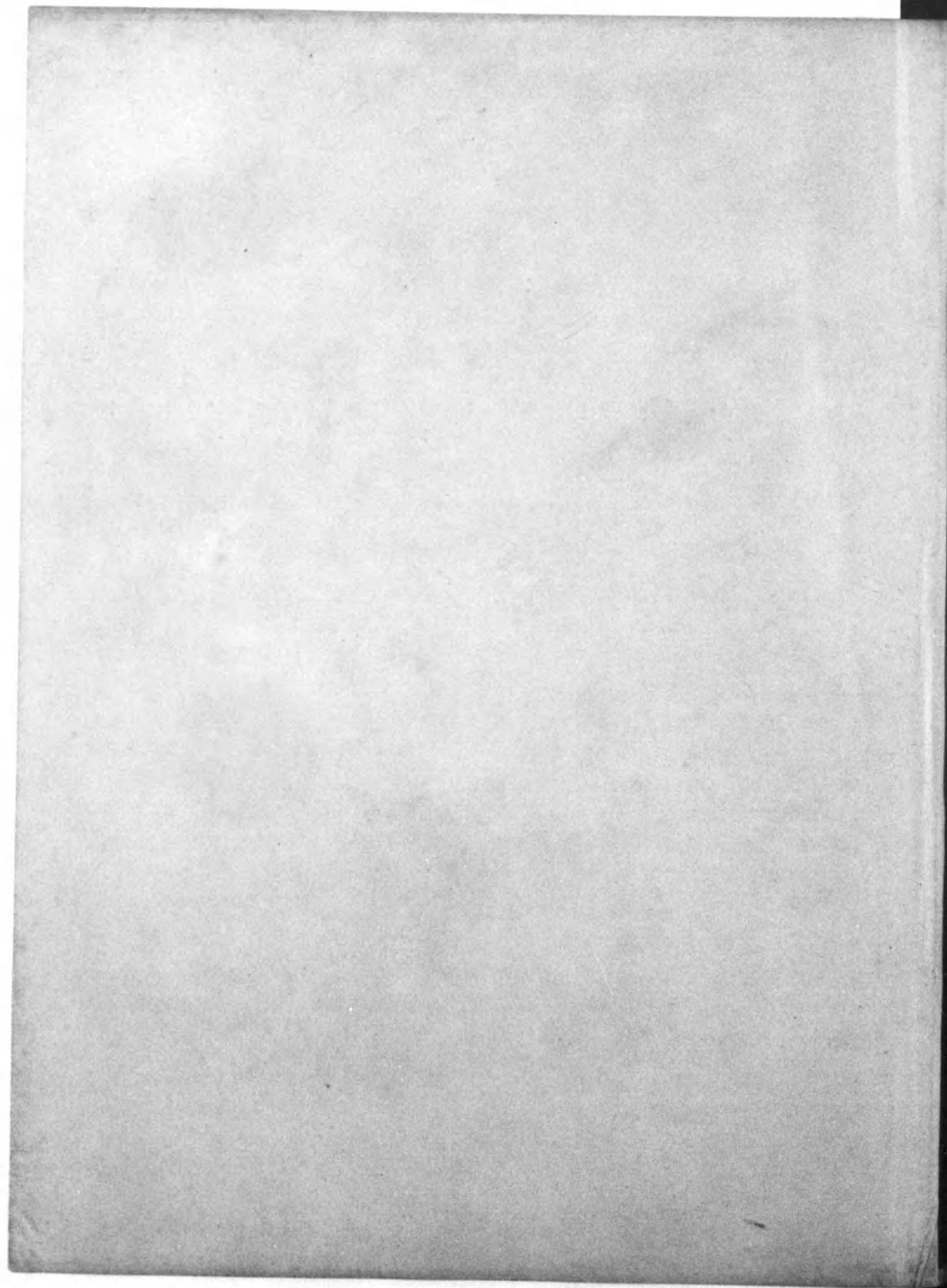
發行者 水戸市西町六八五番地
關口文雄

印刷者 水戸市泉町一、一〇四番地
坂場松太郎

印刷所 水戸市泉町一、一〇四番地
加納印刷所

發行所

水戸市西町六八五番地
伊ハラキ時事社
電話一九一番



393

94

終